

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る 平成21年度 業務報告書

1. 入館状況について

平成21年度総入館者数 489,113人

[総括]

政府の「生活対策」に基づいた、ETC（ノンストップ自動料金支払いシステム）車載器の搭載車に対する「休日特別割引（土・日・祝高速料金1,000円、平成21年3月28日スタート）」の影響を受け、平成20年度と比較して、入館者数は大幅に増加した。（41,601人増、対前年度比109.3%）

ETC割引に加えて、上杉家の家老「直江兼続」を主人公とし、主に新潟県を舞台として展開するNHK大河ドラマ「天地人」の放映（平成20年1月～平成20年11月）、水と土の芸術祭（7月28日～12月27日）の開催、トキめき新潟国体（9月26日～10月6日）の開催、トキめき新潟大会（10月10日～10月12日）の開催、JRディステーションキャンペーン（10月1日～12月21日）の実施等、「新潟」がクローズアップされた年であったことも、入館者増の大きな要因となっている。

4月から10月までは、各月とも平成20年度より入館者数が多かった。

特に9月は、ハッピーマンデー制度と日付の並びにより、平成21年に初めて発生した「9月の大型連休（9月19日（土）～9月23日（祝）・シルバーウィーク）」の影響が顕著であり、対前年度は150.3%であった。

そのような中、例年は8月末で終了する「夏期特別展」を9月27日まで延長して実施したことも、入館者数増に貢献したと考えている。

しかしながら、11月以降は「新潟市内での新型インフルエンザの流行（10月下旬～12月上旬）」「新潟市内で12月としては24年振りの大雪」「26年振りに新潟市内で81cmの積雪（2月上旬）」等の影響を受け、11月の対前年度比は92.2%、12月の対前年度比は87.7%、2月の対前年度比は86.1%と振るわなかった。また、「集中工事等による臨時休館日を例年より2日増やしたこと」「最終週の土・日曜日に雪が降るなど、例年に比べて極端に寒い日が多かったこと」から、3月の対前年度比も94.8%と振るわなかった。

入館者数増やリピーターの確保を目指し、平成20年4月1日から発売を開始した大人用と小人用のパスポート販売に加え、平成21年4月1日から幼児用パスポートの販売を開始したところ、全入館者の0.85%からパスポートを購入してもらうことができた。平成20年度の購入者一人当たりの入館回数は4.6回であったが、平成21年度は5.3回と増加している。

入館者数は、「休みの連なり方」や天候によりかなり左右されるが、今後も展示や企画内容・実施時期等に工夫を凝らすことで、入館者数の増加及び平準化に努めていきたい。

申請や手帳による減免での入館者は、「身障者等手帳」による減免件数は増えているが（対前年度比112.0%）、全体では22,401人と平成20年度より1,979人減少している。これは、全国的に猛威を振るった「新型インフルエンザ」の影響で、免除対象施設が大勢人の集まる施設への来館を控えた事が要因だと考えている。

総入館者に占める減免利用者の割合は4.6%と平成20年度より0.8%減ってはいるが、依然利用者は多く、当館の果たすべき社会的役割は大きいと考えている。

毎月実施しているアンケート調査で「スタッフの丁寧さがよかった」「接客対応が親切でよかった」「館内が広くてきれいよかった」「東京近郊の水族館と比べて、とても充実していると思った」「アットホームな感じがよかった」「なるべく早くまた来たい」等の感想が寄せられている。

売店やレストラン、自動販売機等の付帯事業についても、「お土産店がよかった」「レストランの料理がおいしかった」「オリジナルブリクラがよかった」「最近設置しているところが少ない『メダルの販売機』があっとうれしかった」等の声が寄せられている。

今後も、常におもてなしの心を持ち「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、リピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

[総括]

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。

臨時開館、開館時間の繰り上げ及び延長を行った日のほとんどが、年間平均入館者数を超えており、市民サービスの提供という目的を十分に果たしたのではないかと考えている。

例年実施している1月2日・3日の臨時開館であるが、みなとトンネル開通後、人の流れが変わってきており、ここ数年護国神社への初詣客が増加し、三が日の朝早い時間からマリンピア日本海周辺が込み合うようになっていたことから、従来午前10時から午後5時までとしていた開館時間を、周辺の人出に対応し午前9時から午後5時までに変更した。

1月2日・3日共に風が強く、天候が思わしくなかったことから、マリンピア入館者数及び護国神社への初詣客数は例年より少なかったため、一概に比較することはできないが、開館時間の前倒しが多少なりとも周辺の混雑緩和に役立ったと考えている。

施設・設備の老朽化に伴い施工頻度は高まっていることから、養生を伴う補修工事を実施するため、電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検の実施に合わせて、3月2日から5日を臨時休館日とし、「マリントンネル天井改修工事」「イルカウエイティングプール上屋補修」「館内各所の塗装工事」「各所ワックス塗布」等を実施した。

従来、「12月29日から1月1日」と、「電気事業法に基づく電気設備法定点検実施のために臨時休館している3月の第1木曜日とその翌日」しか休館日がなかったが、年末年始は基本的に工事施工業者も休みであり、3月の電気設備法定点検の初日は停電を伴う作業であることから、他の工事を行うことは難しく、フリーハンドで施工できるのは年間わずか一日しかない状態であった。

客動線に関係する箇所は、なるべく夜間工事で対処してきたが、夜間は施工性が悪く、割増工賃と当館施工管理職員の配備に係る経費の問題が生じる。開館中の施工は来館者への危険性が高まること、雰囲気低下等から本来行うべきではないが、一夜の施工時間には限りがあることやモルタル・塗装等の養生の必要性もあり、開館中の施工もやむを得ない状態であった。

来館者への迷惑を最小限にとどめようと、過去の来館者数データを基に閑散期の平日等を主に実施してはきたが、資材搬入、足場確保、施工中の音・振動等、開館中施工は縛りが強く、大規模な工事は行えないことから、今後、加速度的に進む老朽化対策のため、集中補修工事のための休館日については、来年度以降も必要であると考えている。しかしながら、閑散期の平日とはいえ、3月の上旬でも一日当たり300人の入館者が見込めることから、工事内容・スケジュール調整等をしっかりと行い、工事による臨時休館日を一日でも短くできるように工夫していきたい。

11月21日には、開館時間前の午前8時23分に生じた瞬時停電の影響で非常用負荷がダウンしてしまったことにより、飼育設備の大部分に支障がでたほか、ポンプの停止によりトイレが使用できなくなったため、開館時間を午前10時30分に繰り下げた。

東北電力からの買電と発電機（コ・ジェネレーションシステム）を併用していることから、電気事業者（東北電力）や他の需要家へ悪影響を与えないために、系統連係をとっている。そのため、系統連係が切れた原因の究明はもちろんのこと、東北電力と周波数等を確認しあいながら系統連係をつなぐ必要があることから、短時間での復旧は難しい。

特に今回は、かなり瞬間的な瞬時停電であったため、東北電力からの買電でまかなっている一般用負荷には影響がなく、「1号発電機の保護装置（バリスタ）の焼損による1号発電機の停止」「起動のために必要な補機電源回路への送電ができないことによる2号発電機の自動起動不可」により非常用負荷のみダウンするといった、レアケースであった。

系統連係が必要なコ・ジェネの宿命とはいえ、周辺は停電していないのに、マリンピアだけ停電して臨時休館しているというのは、なかなか市民の理解を得にくい状態であると思う。

今回のような瞬時停電の影響を少しでも受けにくくするために、3月のコ・シェネ保守点検時に「励磁装置改善工事」と「バリスタの全交換」を、また、電気設備点検時に「商業電力引込柱アレスター交換」を実施した。

(2) 展示生物の状況について

[総括]

協定書の仕様書に謳われている約450種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

平成21年度は、近親繁殖防止の目的でゴマフアザラシ1個体を交換、適正な飼育環境維持の目的でアメリカビーバー3個体を搬出した。

飼育下で繁殖したハマクマノミやカクレクマノミの仔魚、稚魚、成魚をマリニピアホール特設ブースに展示した。技術的に困難な仔・稚魚の展示を実現し、周期的な産卵・孵化に合わせて入れ替えることで、成長過程を効果的に展示することができた。

パスポート利用者を意識し、季節感のある展示更新を心掛け、サケ、カワヤツメ、アキアミ等、季節ごとに地域を特徴づける生物を積極的に導入した。また、友好館提携を結んでいるアクアマリンふくしまから受贈したハダカカメガイ(クリオネ)の特別展示を行い、好評を博している(現在も特別展示継続中)。

毎月実施しているアンケート調査でも「日本海らしさのある展示があってよかった」「子どもが小さい頃は何回か来たことがあるが、久しぶりに来て観て、大人も十分に楽しむことができると思った」「日頃見られないものをたくさん見ることができてよかった」「魚の種類が多く、特にマリントンネルの上を魚が通る姿がよかった」「クラゲ等、新しい生物が増えていてよかった」「タッチ水槽で子どもたちが夢中になって、とても楽しめた」「ガラ・ルファ(ドクターフィッシュ)体験が面白かった」等の声が寄せられている。

また、アンケート調査で寄せられた「魚等の名札が赤になっているものが絶滅危惧種とすると分かりやすいのでは」といった意見を取り入れ、レッドデータブックに載っている種の魚名板に赤色を用い、特定外来生物は黄色を用いるなど工夫した。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。

また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力溢れる展示を行っていきたい。

(3) 通年事業の実施状況について

[総括]

a. バックヤードツアー

通常は公開していない水族館のバックヤードを職員の引率で見学し、水質管理の仕組みや餌の解説等を通じて、水生生物やその生息環境についての関心を高めることを目的に実施している。

平日は1日2回、土・日曜日は1日3回実施したうえ、担当者が2名とも出勤している日は定員を倍増することで、実施日数・実施回数・参加者ともに前年度より増加している。

動線の安全確保に十分に配慮し、平成21年度も無事故で実施することができた。

参加者からは「魚を飼育するためには、水質検査、水温調節、餌の工夫など、さまざまなことが必要だということが分かってよかった」等の感想が寄せられている。

b. ペンギンガイドツアー

通常は公開していないバックヤードで、パネル・巣箱・羽毛・卵の標本やレプリカを用いて、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、生息地域外保全活動・繁殖の実施等の解説を行い、ペンギン類とその生息環境への理解を深めてもらうことを目的に実施している。

毎月実施しているアンケート調査で「わかりやすかった」「クイズ形式を用いたり、音を使って説明してくれたので、子どもも楽しめてとてもよかった」等の声が寄せられている。

c. イルカショー・トドの給餌タイム・ラッコの給餌タイム

「イルカショー」「トドの給餌タイム」「ラッコの給餌タイム」は、「水生哺乳類の健康管理には、長期間にわたるトレーニングの成果によることが多い」こと等、生物学的解説に重きを置いて実施している。毎月実施しているアンケート調査で「イルカがジャンプする様子がとても美しく感動した。躍動感がありダイナミックで、迫力と生命力の強さに驚いた」「イルカショーでのへそや肛門等についての説明が勉強になった」「イルカが良く調教されていてびっくりした」「イルカショーで、質問に詳しく丁寧に答えてもらうことができてよかった」「給餌タイムが多くてよかった」「ラッコの給餌タイムの後に、スタッフの方からより詳しい説明を聞かせていただくことができ、非常に勉強になった」「トドの前脚と後脚の発達（太さ）の違いについての説明を聞いて、非常に興味を持った」等の声が寄せられている。今後もこれらの事業を通して、解説パネル等では説明しきれない行動や生態、形態を、正確に具体的にわかりやすく解説していきたいと考えている。

d. タッチ水槽ガイド

生き物のちょっとした不思議を体感してもらおうと、タッチ水槽脇で簡単な実験を見せながら生き物の生態を紹介している。

毎月実施しているアンケート調査で「タッチ水槽で説明があってよかった」等の声が寄せられているほか、「タッチ水槽が楽しかった」という声が従来よりも多数寄せられており、ちょっとした解説や実験といった動機付けが、生き物へ興味を広げるきっかけづくりとして有益であると実感している。

(4) イベント等の実施状況について

[総括]

① 春期特別展「新潟県のカエル・サンショウウオ」

新潟県に生息するカエルとサンショウウオに焦点を当て、両生類の形態や生態、分類や発生等を紹介した。

カエルの卵塊やサンショウウオの卵嚢は産卵時期に合わせてこまめに採取し、幼生は卵から孵化したものを随時展示することで、春期にしか見ることのできない卵や幼生を展示することができた。

毎月実施しているアンケート調査で「住んでいる地域の生き物のことが分かってよかった」「毎日少しずつ展示が変わっておもしろかった（パスポート利用者）」等の声が寄せられている。

② 夏期特別展「ドッキリ 海の有毒生物」

海にすむ危険な生物、その中でも毒を持つ様々な生物に焦点を当て、捕食や外敵から身を守るために体に毒を備えている種について、生体展示と解説パネルで紹介した。

当初8月31日までの開催を予定していたが、「『毒』というのがキャッチーなテーマであった」「身近な海岸でも見ることができる生物も紹介した」ためか、非常に好評であったことから、会期を9月27日まで延長した。生物の飼育維持は大変であったが、会期を延長したことによって、シルバーウィーク期間に訪れた多くの来館者からも、特別展を観てもらってよかった。

毎月実施しているアンケート調査で「見た目が美しいのに、毒を持っていてびっくりした」「ウツボがとても迫力があつた」等の声が寄せられている。

③ サマースクール（付帯事業）

a. ふれあい探検

生き物を間近から観察し、給餌体験や実際に触れることで、水生生物に興味をもつきっかけづくりの場になったと考えている。

参加者は幼児や小学校低学年の子と親といった組み合わせが多く、ガイド方式では子どもが親に頼り切ってしまう場面が多く見受けられることから、子どもの積極的な参加を促すために、体験を重視し、給餌体験を主とすることで、自分たちで考えて行動する場面を多くした。

平成21年度は給餌体験に加えて、初めて「実験コーナー」を設け、講義の時間も取り入れた。

参加者の年齢を考慮し、変化が大きく、すぐに結果がでる 3 種類の実験を行った。解説が伴うことによって、生物の生態について理解を深めることができる実験を取り入れたことで、館内の見学だけでは体験できない、新たな発見に結びつけることができたと思う。

少人数の班に分かれて行動する場面を多くすることで、対話形式での進行を多用し、参加者の年齢構成・興味・知識によって内容や話し方を変える等、フレキシブルな対応を取ることができた。

参加者がアシカへの給餌の順番を待つ場所に、新たに解説パネル等を設置することで、参加者の理解が深まるように工夫した。

アンケートの結果を見ると、参加者の満足度は高く（満足 96%）、「スタッフが親切で、説明が丁寧で分かりやすい」「少人数のグループに分かれての説明だったので大変分かりやすかった」「子どもだけでなく、大人も充分楽しめる内容で、期待していた以上だった」「いつもは何気なく魚を見ているが、説明を聞くことによって、自分の中で特別なものになっていくのが楽しかった」「生活環境に合わせた体のつくりになっていることがよくわかった」「水族館を運営していくのには、展示を見ているだけではわからないところで、さまざまな工夫や努力が行われていることがわかった」「水質の管理は非常に難しいことを知った」「楽しく見ることができると水族館の裏側では、魚に細かく目を向け体調管理をしていて大変だと思った」「裏側では、控えの魚がいたり、それを飼育していたり、餌を用意していたり、病気を治したりと、たくさんの仕事があることがわかった」「自然界で生きているものを飼育するのは、大変なお金と手間がかかるものだと思った」「年をとったアザラシ等も大切にしていることを知り感動した」「感染防止に非常に注意をはらっていることがわかった」等の感想が寄せられた。

平成 21 年度は、「ふれあい探検」の魅力でもある「バックヤードを通る楽しみ」を損なわないように、動線は基本的にバックヤードにこだわった。また、「バックヤードツアー」への参加経験者が増えていることを受け、バックヤードツアーに組み込まれている内容を極力省いて実施した。

参加者の安全確保を最優先としながら、「より学習効果の上がるツアー動線」や「無料で参加できる『バックヤードツアー』との差別化」について、今後も検討を重ねていきたい。

b. ドルフィンスクール

イルカに関する正確な知識の向上を目的として、講義、観察、体験学習を組み込んだプログラムを実施した。

ポティチェック体験ならびにプログラム前後での「イルカのパズル」及び「イルカの体の名称記入」の実施により、参加者自身がイルカに対するイメージの変化を実感できるように工夫した。

昨年までは「イルカの外見描画」を行っていたが、絵を描くのが苦手な参加者が割合と多く、描画に時間を取られがちになっていたことから、イルカの体を 4 分割し、各部位で異なるパズルを 4 枚ずつ用意した「イルカのパズル」を新たに導入した。

パズルは制限時間を設けゲーム感覚で行えるとといった利点があり、楽しみながら知識を習得するのに有効な手段だと思った。

アンケートの結果を見ると、参加者の満足度は高く（満足 95%）、「イルカの体のつくりや健康管理について知ることができてよかった」「イルカはかわいいイメージがあったけれど、大きくて怖かった」「トレーニングは様々なステップが必要なことが分かった」といった声が寄せられた。

c. イルカトレーナー体験

鯨類を飼育する上で必要不可欠な生物学、飼育環境、行動形成などについて理解を深め、正確な知識の向上及び正しい情報の発信を図ることを目的として実施した。

少人数性で、実際にトレーナーの仕事（餌料の準備、ポティチェック、検温、分析、行動形成の理論及びシェイピングゲーム）を体験してもらうことにより、鯨類への関心を高めることができたと考えている。

アンケートの結果を見ると、参加者全員が満足と回答しており「トレーニングが健康管理においても

重要であることが分かった」「トレーニングについて学ぶことができてよかった」「イルカを間近で見ると、歯は鋭く、体は大きくて迫力があるので驚いた」「マンツーマンで指導してもらえてよかった」といった声が寄せられている。

「日常の健康管理」に重点を置いたやや専門的な内容であることや、直接生物に触れる時間が長いことなどを考慮し、参加者のイルカに対する基礎知識を高めるために、従来4時間であった講座時間を5時間に延長し、最初に講義や施設見学を行い、基礎知識の習得に努めてもらった。

その結果、イルカの生態等を理解した上で、イルカへサイン出しや、イルカの体に触る体験を行うことができ、学習効果が高まったと考えている。

d. ナイトツアー

通常是非公開の夜間の水槽の様子を観察してもらうことで、生物の生態や自然環境への関心を高めてもらうことができたと考えている。

実施時間が遅いこと、館内を歩く距離が長いこと、サマースクールには他に幼児が参加できるコースがあることから、平成21年度は対象を4歳以上から小学生以上に引き上げた。思い切って対象年齢を変更したことによって、数少ない夜間の水族観察の機会であるナイトツアーを、学習に重点を置いたプログラムにすることが可能となった。

まず照明下で昼の生態や変化前の姿を観察してもらい、消灯後、十分に生物が変化したところを見計らって再度照明を落とした水槽を観察してもらった。このことによって、実際の変化を目の当たりにでき、参加者にとって理解しやすかったようである。

夜間の生態の変化だけではなく、隠ぺい色、発光生物、蛍光たんぱく質の役割についても学習できる内容を取り入れた。展示課職員によるツアーガイド形式をとったことにより、参加者からの質問に即応が可能であり、教育的効果の高いプログラムになった。

アンケートの結果を見ると、参加者の満足度は高く（満足96%）、「昼と夜の行動の違いがよく分かった（参加者の51%が回答）」「夜に活動的になる生物を見ることができてよかった」「今度、昼間に来た時に、夜との違いを気にしながら観覧したい」「身を守るための自然の工夫を感じた」「参加人数がほどよく、ゆっくりと話を聞いたり、質問することができてよかった」「順路や班の人数等、よく工夫してあると思った」「ただ水族館に来て見るより、説明を聞きながら観るのはずっと面白い」「ナイトツアーは2回目だが、前回と内容が違っていて、今回も楽しかった」「始まる前は時間が長すぎると思ったが、楽しくてあっと言う間だった」「途中で眠くなったけど楽しかった」「何を質問してもすぐに答えが返ってくるのすごかった」といった感想が寄せられた。

夜の企画ということもあり、平成20年度までは金曜日と土曜日に限って実施していたが、平成21年度については他の曜日（火・木）も実施日に加えた。曜日に関わらず応募があり、また、参加者から実施曜日についての不満等の声は挙がっていなかった。夏休み期間については、曜日にこだわらずに実施することが可能であると感じた。

参加者からの「一部小さい水槽では、立ち位置によっては見づらいことがあった、解説と見学内容がよかっただけに残念」といった意見への対応や、「屋外施設での観察時に、まだ屋外が明るすぎる」「水族館周辺では必要量のウミホタル確保が不安定である」等の問題については、来年度への課題としたい。

④ 第12回児童絵画展（付帯事業）

描くことを通して、水生生物への関心を高めてもらうよい機会になったと考えている。また、入選作品の館内展示や、出展者全員への家族割引券配布が、閑散期の来館促進に貢献していると考えている。さらに、学校経由で作品を募集していることにより、学校遠征での利用促進の動機付けともなっている。平成21年度は入選数＝展示数を48点増やし、より多くの作品を来館者から見てもらうことができた。冬休み期間を中心に作品を展示したことから、出展者も来館しやすかったようで、入選者や出展者へ配布した招待券や割引券での入館者数は472人であった。

今後、対象を児童以外とした取り組みや寄せられた作品の活用等について検討していきたいと考えている。

⑤ 春期特別展「新潟県の希少淡水魚保護の現状」

マリンピア日本海では、開館以来、県内各地で行ってきた生息調査活動を通して、地元の保護団体と交流を深めている。

水族館・保護団体同士の連携は、保護活動を展開する上で極めて重要となっていることを踏まえ、県内に生息する代表的な希少淡水魚シナイモツゴ、イバラトミヨ、ホトケドジョウの保護活動に取り組む4つの地元団体について、パネル等を用いて紹介した。

併せて、水族館で繁殖に成功した希少淡水魚も展示した。

関連事業として、3月27日に「マリンピアフォーラム 2010 新潟県の希少淡水魚保護の現状」を実施した。4つの地元団体の方から講師となってもらい、それぞれの保護の現状を語ってもらったほか、水族館で行っている飼育下繁殖の取り組みについても紹介した。

日常の活動から生まれた、現場の生の声を聴くことで、希少淡水魚を取り巻く問題や今後の展望について考えるよい機会となった。

⑥ いきもの教室（付帯事業）

毎月1回、季節感を考慮したテーマ設定を行い、プログラムによって対象年齢を「4歳～小学3年生」「小学生以上」「小学4年生以上」「中学生以上」と細分化して実施した。

「小学4年生以上」と新たに設定した「中学生以上」の教室への応募者数は少なかったものの、全体では2倍近くの応募があり、市民の関心の高さがうかがえる。

アンケート結果を見ると、参加者の満足度は非常に高く、「図や模型やぬいぐるみを使っての説明が分かりやすかった」「映像ではなく、実物に接して確かめながら学べる点がよかった」「実際に餌を食べているところを見たり、顕微鏡を使ったりと、家では体験できないことできた」「身近な生き物であっても、その生態については意外と知らない事が多い」「新しい発見があり、勉強になった」「大人でも十分に楽しめる内容であったことから、親の方が夢中になってしまった」「観察する時間をたっぷり取ってもらえたのでじっくりと観察でき、子どもとも意見交換ができて、とてもいい時間を過ごすことができた」「解剖で体の構造等を観察した後に魚の泳ぐ姿を見ると、ひれの動かし方等、いつも見ているのと違う見方ができた」「生き物に触ることができなかった子どもが、ヤドカリをつかんで観察することができたので驚いた」といった感想が寄せられている。

専門的な事柄を分かりやすく紹介するプログラムを企画し、「教室」として行っていくことが、職員の知識や技術の向上に非常に役立っており、今後も継続していきたい事業である。

(5) 専門的な調査・研究等について

[総括]

「鯨類の繁殖生理に関する調査」「鯨類の生理機能に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。

日本動物園水族館協会の会議や研修会へ出席し、積極的な調査研究成果を発表する共に、最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図っている。また、日本動物園水族館協会種保存委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。

これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。

平成21年2月24日から平成22年3月27日までの火曜日から土曜日に、新潟日報で「マリンピアの仲間たち」を連載した。生物、施設、訓練、健康診断、治療、繁殖、餌、事業等、短い文章のなかで分かりやすい言葉を用い、さまざまな切り口・角度からマリンピア日本海を紹介することができた。

また、行政や自然保護団体等と協力し、種の保存や自然保護の啓発に努めている。

平成 21 年度は、5 月 28 日から 31 日に朱鷺メッセを会場として開催された「日本発生物学会」にも協力した。5 月 30 日に実施された市民公開講座「クラゲの光からレスノーGFPと生命科学」の関連展示として、平成 20 年のノーベル賞で話題となった「オワンクラゲ」を学会会場で展示したほか、市民公開講座に対して「マリンピア日本海」として後援し、HP 等で公開講座を紹介した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していくように心掛けていきたい。

(6) 総合学習の受け入れ状況について

[総括]

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質疑応答やキーパーエリアガイドを通して、子供たちに生き物や環境に関する正しい知識を伝える場となっている。

キーパーエリアガイドは、人数を制限し、時間をずらして対応する等、安全に配慮して実施した。

来館した児童・生徒から、多数の礼状や、「光の調節、魚の種類の組み合わせ、水温調節、餌の保存の仕方等、たくさんの工夫があることが分かった」「ろ過装置の大きさにびっくりしたが、その装置のおかげで 10 年以上も長生きをしている魚がいることを知った」「ホトケドジョウ等の絶滅しそうなる生物がいること、それを保護していることを学んだ」等の感想が寄せられている。

「職業に対する関心を高める」「職業・職種の内容や働く意義について考えを深める」ことを目的とした「職場訪問」といった切り口での総合学習も多かったことから、「職員の方々の工夫や苦労があつてこそ、魚が快適に過ごすことができる環境を保てることがわかった」「普段何気なく見ている水槽、海の生き物たちを保つために、たくさんの人の力があつて、餌の一切れ、水の一滴まで飼育員の皆さんの力を感じることができた」

「仕事の大切さややりがいについて教えてもらい、『私たち自身が未来に向かって頑張らないと』という気持ちになった」「マリンピアには大きな水槽が非常に多く、大きな機械もたくさんあるので、働く人たちが協力しないと仕事が円滑に進まないということを学んだ」「水族館はたくさんの仕事の一つひとつ集まってできたもので、全てが大切な仕事なのだということがわかった」等の感想も寄せられている。

子どもたちの水族館や水族への関心を呼び起こす機会・環境保全について考える機会として、また、子どもたちが社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として、非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(7) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

[総括]

大学生・専門学校生に実習の場を提供するという社会的貢献の側面はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の自己研鑽の場ともなっているので、今後も継続して受け入れを行っていきたい。

臨海実習については、海洋フィールドを題材にできる貴重な教育学習機会であることから、今後も継続して指導者を派遣していきたいと考えている。

平成 21 年度は、地域でシナイモツゴの保全に取り組む関川村の保護団体による観察会での解説や、教育施設での職業講話等、積極的にアウトリーチ事業を行った。今後も要望があれば可能な限り対応していきたい。

(8) 市民ボランティアの活動の状況について

[総括]

いきもの教室の補助、館内案内、館内アンケート、ナンバー調査、来館者との交流等を通して、水族館の運営に直接・間接的に参画してもらうことで、市民と水族館をつなぐ役割を果たしてもらっている。

「いきもの教室」で参加者がグループに分かれて細かい作業を行う際に、参加者をうまくリードしてくれる等、「いきもの教室」での市民ボランティアの活躍は目覚ましく、当館にとってなくてはならない、かけがえのない存在となっている。

「いきもの教室」の参加者へのアンケートには「スタッフやボランティアの方々の気配りがとてもよかった」「スタッフだけではなくボランティアの協力により成立していることが、とても素晴らしいことだと思う」「ボランティアさんが優しく、温かく見守ってくれたり、一緒になって注意してくれたのでありがたかった」といった声が寄せられている。

平成 21 年度は新規募集を行ったことでメンバー層に厚みができた。登録者数は3倍の 36 人に増加し、活動日数は 3.9 倍に、延べ活動人数は 5.2 倍に伸びた。

ボランティアの自主性をより活性化するために、ボランティア向け研修プログラムの充実を図った。館内での研修、友好館提携を結んだ「アクアマリンふくしま」の市民ボランティアとの交流、研修視察の実施、消防訓練への参加等、さまざまなスキルアップ策を講じており、今後ますます活動の幅が広がっていくことが期待できる。

水族館、来館者、ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

(9) 広告宣伝について

[総括]

平成 21 年度は、E T C割引と大観光交流年との相乗効果及び9月にシルバーウィークが発生したことにより、例年より多くの来館者が見込めることから、テレビCMとクーポン付き折込チラシを広告の大きな柱として展開していった。

テレビCMはコンペを実施した。その結果、平成 19 年度から導入した「オリジナルCMソング」の継続提案を、費用対効果が最も高いと評価し（①新規のCM製作分をスポット本数の増に充てること、②継続性の広告効果）、引き続きCMソングを用いたテレビCMを採用した。

平成 19 年度・20 年度と放映した「イルカ編」「さかな編」に加え、平成 20 年度に作成した「オリジナルCMソングCD」の歌詞を用いて「ペンギン編」を新たに制作した。3 編で展開することにより、従来から継続している歌詞・メロディの視聴者への刷り込みを行う一方、さらに新編の登場で注目を集めることができたと考えている。

放映は平成 20 年度に引き続き4月から9月にかけて連続で行った。平成 20 年度は、GWと夏休みに重点を置いて放映したが、平成 21 年度はE T C割引により入館者の分散化が予想されたことから、6 月やシルバーウィーク前にも放映本数を増やした。

また、子どもに人気のアニメを見ると必ず「マリンピア日本海」のCMが流れるといった、親子にターゲットを絞った「固定スポット」での放映も継続し、新潟・山形・福島の3県全てで実施した。

同じCMソングを3年間継続して使用したことにより、歌を聴くとすぐに「マリンピア日本海」がイメージできるほど定着したようである。親しみやすいメロディと子どもが興味を持ちやすい歌詞で、自然と口ずさんでしまうオリジナルCMソングは、マリンピア日本海のイメージアップに大いに役立ったと考えている。

クーポン付き折込チラシは、E T C割引の効果を見込み、山形・福島・群馬・長野に加え、GWには新たに埼玉県の間越自動車道沿線地区までエリアを拡大し5県で展開した。夏期には新潟県（新潟市に隣接した市を除く全てのエリア）も加え6県で展開した。山形県については、新たに新庄市エリアを加えたことによって全県での展開となった。

新聞広告と異なり保存性が高いという媒体の特性を生かし、GW折込分には「GWファミリークーポン」と秋期大型連休まで利用可能な「夏休みファミリークーポン」を、夏期折込分には「夏休みファミリークーポン」と、「水と土の芸術祭」の会期に合わせ冬期まで利用できる「秋・冬ファミリークーポン」を掲載した。クーポンを利用した入館者は、年間で約 32,000 人と全体入館者数の 6.6%を占めていることから誘客促進に役立ったと考えている。

新聞広告に替わる媒体として 20 年度から行った「FMラジオ広告」は、従来の「FM群馬」「FMぜんこうじ」に加え、「FM新潟」「FM福島」「FM山形」の5局で展開した。4 月から 9 月まで実施していた放送

を11月末まで延長することで、テレビCMが9月で終了した後の2カ月間をラジオで補うことができた。

「FMぜんこうじ」では週4回、他局では週3回、20秒のスポット広告を「ドライバースゾーン（通勤・帰宅時間帯）」に入れた。テレビCMで用いているオリジナルCMソングを使ったことにより、印象に残りやすく、効果的な宣伝ができたと考えている。

天地人やディステーションキャンペーン・国体と新潟県が全国から注目されるなか、ETC割引を利用している県外客獲得のため、7月から9月までの3カ月間、高速道路で配布するフリーペーパー「ハイウェイウォーカー」に広告を掲載した。「ハイウェイウォーカー」は発行エリアが広く、発行部数も北海道・東関東を合わせて102万部と非常に多い。また、もともと広告掲載頁が少ないため、広告自体が非常に目立つといった特性をもっている。

高速道路の地図が掲載され、SAや周辺観光スポット情報が充実していることから、高速道路を利用する人にとって人気のフリーペーパーであり、保存性も高いことから、費用対効果の高い広告を展開することができたと考えている。

ホームページは、今まで以上に頻繁に更新を行い、常に最新の情報を発信することを心掛けた。年間パスポート利用者を意識して、特に「いきもの観察情報」のこまめな更新に努めた。

また、ホームページアクセス者に対するサービス企画として、県外からの有料入館者のお客様に対して、「水と土の芸術祭」のパスポートをプレゼントするWeb引換券や、「オリジナルCMソングCD」をプレゼントするWeb引換券をアップした。

「水と土の芸術祭」パスポートのプレゼントについては、先着100人分のパスポートを用意していたが、マリンピア日本海来館者と水と土の芸術祭に興味のある人があまりリンクしなかったせいか、最終的には77人へのプレゼントとなった。しかしながら、近隣県のみならず18府県からの応募があり、新潟市への集客の一助になったと考えている。

ホームページへのアクセス数は非常に伸びており、平成20年度では168,485件だったトップページへのアクセス件数は、平成21年度では215,170件と伸び、対前年度比127.7%であった。

「大観光交流年」は終了したが、開館20周年となる平成22年度も引き続き、多種多様な方法でマリンピア日本海の魅力を全国に発信していきたい。

(10) 友好館提携を結んだアクアマリンふくしまとの協力について

〔総括〕

平成19年11月23日に友好館提携を結んだ「アクアマリンふくしま」とは、活発な生物交換、両館の市民ボランティアの交流等、さまざまな方向で友好館提携の効果が現れている。

生物交換では、6月にアクアマリンふくしまからの要請を受け、マリンピア日本海が佐渡乗船採集で得た深海魚「ザラビクニン」を分譲した。3月には、アクアマリンふくしまが採集したハダカカメガイ（クリオネ）を分けてもらい、特別展示を行っている（現在も継続中）。

市民ボランティア活動では、アクアマリンふくしまのボランティアが10月と11月に来館、マリンピア日本海のボランティアが11月にアクアマリンふくしまを訪れ、ボランティア活動状況の情報交換等を行い、交流を深めた。

「アクアマリンふくしま」主催で2月に実施された「水族館フォーラム」では、鈴木館長が講師を務め「水族館と環境メッセージ」について語った。

今後も、飼育生物の繁殖や育成に関する情報交換や技術交流をこれまで以上に活発化し、共同研究の実施等学術的な交流を進めていきたいと考えている。

平成20年4月から発売を開始した年間パスポートでは、相手館の年間パスポート持参者に対する割引制度を同時にスタートした。初年度である平成20年度は、アクアマリンふくしまのパスポートを提示してのマリンピア日本海入館者は52人、マリンピア日本海のパスポートを提示してのアクアマリンふくしま入館者は118人であったが、2年目となった平成21年度は、アクアマリンふくしまのパスポートを提示してのマ

リンピア日本海入館者は 191 人と 3.7 倍に、マリリンピア日本海のパスポートを提示してのアクアマリンふくしま入館者は 200 人と 1.7 倍とになった。それぞれの館のパスポートを有効に利用する人が急増していることから、パスポートの認識度の高まりが感じられる。

(11) 年間パスポートについて

平成 20 年 4 月 1 日より発売開始

大人（高校生以上）3,500 円、小人（小・中学生）1,300 円

平成 21 年 4 月 1 日より幼児用を新たに発売開始

幼児（4 歳以上未就学児）400 円

[総括]

生物継続観察の機会を低い経済負担で提供できる方法として、平成 20 年 4 月より「年間パスポート」を導入した。当初、大人用と小人用のみの発売であったが、平成 21 年 4 月からは幼児用の発売もスタートし、全券種のパスポートを揃えることができた。

幼児用パスポートの料金は、400 円（通常料金の 2 倍）に設定した。

入口・受付の構造がパスポート販売に適していないため、多客時の販売場所の確保が難しい状態である。

多客期については、パスポート料金の収納までを受付が担当し、別室で職員が説明、写真撮影、データ登録、パスポート発行を行ったが、レクチャールームを臨時パスポート受付会場として利用すると、会議や作業等に利用できるスペースがなくなること、事務室から離れた場所に職員を常駐させなければならず、日常業務の効率が悪くなるといった弊害が生じている。リニューアルによって改善が図られることを切に願う。

パスポート購入者は 4,136 人（総入館者の 0.85%）、パスポート利用者（購入者＋リピーター）は 22,079 人（総入館者数の 4.5%）であり、パスポート利用者の平均入館回数は 5.3 回であった。

毎月実施しているアンケート調査で「魚の生態が発見できて楽しい」「初めて来た時、子どもが怖がって『帰りたくない』と騒いでいたが、回を重ねることに楽しめるようになってきた」「パスポートのおかげで何回も来ることができるので、一回で全部見ようとする必要がなく、とてもゆったりと楽しめる」「毎回来るたびに満足しています。来年も必ずパスを買うつもりです」等の声が寄せられている。

アンケート調査での「生物の変化を発見できたか」との問いに対して、約 60%の人が「発見できた」と回答しており、「新鮮味が感じられる・季節感のある展示」を心掛けてきたことが、ある程度評価されたと考えている。

また、「次回のパスポート購入予定は」との問いに対しては、「購入の予定なし」と答えた人が 2.5%で、約 70%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるようにしていきたい。

(12) リニューアル基本計画策定検討委員会ワーキンググループへの参加について

[総括]

平成 21 年度は、リニューアル基本計画策定検討委員会ワーキンググループの一員として、また、リニューアル基本計画策定検討委員会にはオブザーバーとして参加し、「新潟市水族館リニューアル基本計画」策定の一翼を担った。

開館から 19 年間「マリリンピア日本海」の管理運営を行ってきた事業者として、現在の施設の問題点や老朽化の状況等を報告し、「水族館事業を行う専門家集団」としての情報提供や積極的な提案を行った。

近年、施設・設備の老朽化・損傷・摩耗が顕著化しており、リニューアルを実施していく際に、耐用年数を意識した大規模な修繕を織り込んでいくことが不可欠な状態となっている。

リニューアルにしろ大規模修繕にしろ、水族館の場合は他の施設と異なり、生物の飼育を継続しながら工事を進めていかなければならない。設備の連続稼働自体が、飼育生物の生命を支えていることから、設備の更

新や工事を実施していく時に、単純に「休館」や「一部利用禁止」にするだけでは済まされないことを念頭におき、現在飼育している生物の命を守りながら、リニューアルや大規模修繕を行っていくためには、「設備の更新や工事自体が可能なのか」「どのような方策であれば可能なのか」「どのような段取りが必要なのか」といった検証を、今後も市に協力して進めていきたい。

また、水族館では飼育生物と設備が表裏一体であることから、展示コンセプトを具現化するためには、どのような設備機器が望ましいのかということも課題となってくることから、市に対して「水族館業界のトレンド」「新たな飼育手法」「最新の飼育設備」についての情報提供を行っていくことはもちろんこと、「リニューアル後の展示コンセプト」や「設備の更新や工事実施中の飼育継続方法」等についても、今後も積極的に提案していきたい。

3. 入館料収入の実績について

平成 21 年度入館料収入 472,223,438円
(対前年度比 109.3%)

[総括]

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適切に実施した。

ETC割引や大観光交流年における一連の行事等の影響を受け、平成 20 年度と比較して入館料収入は大幅に増加した。(40,305,802 円増、対前年度比 109.3%)

直近過去 5 年間の中でも最も入館料収入は多かったが、水と土の芸術祭パスポートによる割引等、総入館者に占める割引(減免)利用者の割合が増加傾向にあることや、パスポート購入者の 1 人当たりの入館回数が 5.3 回と多いことなどから、客単価は 965 円であった。客単価は平成 20 年度と同額ではあったが、平成 19 年度と比較して 12 円も下がっている。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施した。

日々、減免業務を行っている指定管理者として、『適応指導教室』に通室している児童又は生徒及び引率者について『特別支援学級』と同様の扱い(全額免除)にできないか』『児童相談所』で一時保護した児童及び引率者について全額免除の扱いにできないか等、条例・施行規則からこぼれ落ちてしまうケースについて、減免対象への追加を市に提案した。

減免に関しては、実務を行っていないと分からない部分も多いことから、今後も社会のニーズを的確に把握し、新たに対象とすべき事由があれば、必要に応じて市へ提案を行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

[総括]

開館から 19 年を経た現在、施設・設備の老朽化や損耗が激しく、工事費、修繕費が嵩んでいる。

平成 21 年度については、海水取水施設の不具合解消に多額の費用がかかった。

調査等に基づきながら段階的に不具合箇所の解消に努めたが、最終的には海岸保全区域内に埋設されている海水取水本管の取替工事が必要であった。「海水取水管理設部取替工事」については高額な工事であることから、本来は市が事業主体となるべき工事であったが、国交省の護岸改修工事との調整の中で、限られた工期内に施工する必要があったことから、市と協議の上、指定管理者が事業主体となって実施した。

特別展の準備や修繕を自前で行ったり、委託業務の仕様の見直しや複数年契約の導入により委託料支出を抑えたりと、できる限りの経費削減に努めたが、年度当初に年度協定書で定めた指定管理料に不足が生じたため、変更協定を締結した。

コ・ジェネについては、長期計画を立てて保守点検を行っているが、部品単価が高いことから、交換予定時期になっても予算措置されず、保守点検計画が後送りになっているのが現状である。

ディーゼル機関点検の基本項目及び特別項目、補助機関点検の基本項目及び特別項目の組み合わせによって、年度ごとに掛かる経費が異なることから「個別算定予算」になっているのにも関わらず、市財務課側がコ・ジ

エネの保守に関しても「予算の平準化を図る必要がある」と本末転倒なことを言っており、平成 20・21・22 年度の予算額は同額で推移している。

平成 22 年度はディーゼル機関 2 号機がエンジン全体のメンテナンスを行う E 点検の年に、平成 23 年度はディーゼルエンジン機関 1 号機が E 点検の年に当たるため、ディーゼル機関点検の基本項目だけでも費用が高くなるが続くのだが、安易な平準化がこのまま続くと、特別項目の点検が十分に実施できない状態に陥ってしまい、点検の不備を原因とする故障や事故が生じてしまうのではないかと、危機感を募らせている。

コ・ジェネの運転燃料として使用している A 重油については、平成 19 年 10 月までは 1 リットル当たり 50 円代で推移していた単価が、その後は急上昇し、平成 20 年 7 月では約 2 倍の 112.3 円/リットルにまで上昇した。平成 21 年 4 月には 38.80 円/リットルと下落したものの、その後上昇傾向であり（平成 22 年 4 月現在で 57.00 円/リットル）、今後の価格推移は不透明である。

A 重油経費は指定管理料の 1 割程度を占めていることから、その価格の変動は指定管理料を圧迫する大きな要因となっており、計画的な執行を阻害している。

水族館管理経費の内、枠配経費については、購入する消耗品の再検討、委託やリースの見直しなど細々としたことを積み重ね経費削減に努めてはいるが、物価の高騰（特に A 重油の高騰）や、施設の老朽化による維持補修経費の増加は避けられない状態であることから、今後も毎年のようにマイナスシーリングがかかってくると、現在のレベルを維持した管理を行っていくことは、非常に難しいと思われる。

特に、工事費や修繕費については、施設・設備の老朽化や損耗は加速度的に進んでいること、工事費や修繕費が枠配経費であること、リニューアル基本計画は策定されたものの、基本設計・実施設計がこれからであることから、出戻り工事等を懸念する市の意向もあり、工事費や修繕費が十分に予算措置されない可能性が高いことなどが、不安要素となっている。現場としては、出戻り工事等は極力避けるのは当然のことながら、入館者の安心・安全確保が最優先であると考え、リニューアルまでの間であっても必要な工事・修繕を行い、結果的に出戻り工事になってしまってもやむを得ないと考えている。

平成 18 年度及び 19 年度にコ・ジェネに故障がおき、機械保険を利用した際に、「修繕費の支払いは指定管理者、保険金の受け取りは新潟市」という、本来「機械・設備が偶発的な事故によって損害を被ったときに、再び運転可能な状態に復旧するための修繕費」とするために加入している保険が、修繕費に直接充当できない不合理な状態に陥った。

平成 20・21 年度は機械保険を使うようなコ・ジェネの故障は生じなかったが、エンジン更新から約 10 年が経過しており、今後また故障しないという保証はないことから、「保険金の受取者と修繕費の支払者を同じにする」または「保険金のうち修繕にかかった費用については、修繕業者を受取人として支払う」等、業者への修繕費の支払方法を勧告して、保険金の受取人を指定できるように、行政内部での調整を昨年に引き続きお願いしたい。

現在飼育している生物の健康管理をより適正に行い、高齢な生物に対しても負担が少なく、かつ十分な医療検査や医療処置が行える体制整備が急務となっていることから、平成 21 年度はやりくりの中で「エコー診断装置」等の医療機器を購入した。

マリンピアで飼育しているアザラシやペンギンには旧水族館から飼育している個体が含まれ、イルカやその他の生物についても平成 2 年の開館時から飼育している個体が半数以上である。飼育生物の高齢化が進み、心臓病、腎臓病、腫瘍等の病気を患い、死に至る例も多くみられ、今後この傾向は増すばかりである。また、動物愛護意識の高まりとともに動物園水族館の展示生物に対しても、動物福祉的かつ人道的にも適正な飼育管理（環境エンリッチメント）が求められる社会情勢にある。そのうえ、イルカ、アザラシ、ラッコ、ペンギン等の集客力の高い生物は、公的な野生動物保護意識の高まりとともに、機会的にも金銭的にも年々入手困難になる傾向にあることから、長期間の飼育展示を目指すことが必要不可欠となっている。

近年の水族館動物医学の進歩は著しく、適切な医療機器を用い検査や処置を行うことで、従来は助からなかった生物の早期治療や回復が可能となってきている。今回の医療機器の導入により、現在飼育している生物の健康管理をより充実させ、より長期間の飼育展示を目指すことはもちろんのこと、動物福祉的観点からも社会的

批判にも耐えうる医療処置等が可能になったと考えている。

平成 22 年 3 月から、市内の知的障がい者授産施設で製造されているトイレトーパーの使用をスタートした。1 ロールあたりの単価が割高であるが、障がい者支援という目的があっても、消耗品費は枠配経費であり、その分が増額されて予算措置されるわけではないため、館内全体での利用は難しく、団体休憩室のトイレと本館身障者用トイレに場所を限って設置している。

納品に来られる障がい者の方の表情をみていると、働く喜びに溢れており、障がい者の方が「仕事を通じて社会に参加すること」に少なからず貢献することができたと考えている。予算の上限もあり大量には購入できないが、今後も継続していきたいと考えている。

5. まとめ

E T C 割引等の追い風を受け、平成 20 年度と比較して入館者数・入館料収入ともに増加し、事業計画の目標値を大幅に上回る事ができた。

しかしながら、近隣に平成 12 年にはアクアマリンふくしま（福島県）、平成 14 年にはアクアワールド・大洗水族館（茨城県）といった競合施設がオープンするなかで、当館は「新施設の建築」や「目玉となるような新しい飼育動物の導入」といった、インパクトのあるリニューアルを実施していないことから、展示内容が固定化し、魅力や鮮度が希薄化している現状は変わらない。

平成 24 年にはマリニピア松島の仙台市移転（現在、資金調達の問題で微妙な状態ではあるが…）、平成 26 年には北陸新幹線全線開通も控えており、リニューアルによる新たな魅力づくりは急務であると考えている。

毎年、常設水槽の展示内容変更やキャビネット水槽を増設することで展示内容の充実にも努めているが、大きな集客効果を期待できるレベルには至っていない。また、ソフト面についても、「いきもの教室」「バックヤードツアー」「ペンギンガイドツアー」「サマースクール」等、教育的効果の高いプログラムの充実を図っているが、教育効果に重きを置けば置くほど、定員を設けた企画にならざるを得ないのが現状であり、入館者を大きく伸ばす要因とはなっていない。

そんな中、リピーターの確保を目指し、大人用・小人用に続き、平成 21 年 4 月からは幼児用パスポートの販売をスタートした。パスポート購入者数は 4,136 人と、パスポートがスタートした平成 20 年度の 4,394 人に及ばなかったものの、パスポートリピーターは 17,943 人と、平成 20 年度の 15,743 人を大きく上回り、パスポート購入者から 1 人平均 5.3 回も来館してもらうことができた。

パスポート利用者の入館回数が多くなれば多くなるほど、入館料収入に結びつかないといったジレンマはあるが、生物継続観察の機会を低い経済負担で提供できるといった目的は十分に達しているのではないかと思う。施設については、多客時における駐車場不足、バリアフリー対応の不足、見学を念頭に置いていないバックヤードの造り、繁殖や保護・治療のための予備施設の不足、図書・資料・標本等を配した情報コーナーの未整備等、多くの課題を抱えている。そのうえ、開館から 19 年を経た現在、施設・設備の老朽化や損耗が激しくなっている。

予算上の制約はもちろんのこと、躯体・設備等構造上の制約もあることから、それら全てがリニューアルによって解消されるわけではないが、少しでも改善策が盛り込み、市民サービスの向上が図られるよう、指定管理者としてよりよい提案を行っていきたい。

7 月のワーキンググループからスタートした「リニューアル基本計画策定検討委員会」では、当初 2 期工事で実施する予定だった「イルカプール及び別館エリア」と、当初 3 期工事で実施する予定だった「マリニピア及びイルカ屋内プール」のリニューアルが、12 月末の市長説明で覆り、展示エリア全てを 1 期工事で実施する方向に変更となってしまった。

水族館の場合は他の施設と異なり、生物の飼育を継続しながら工事を進めていかなければならないため、展示エリア全てを 1 期工事で行うことで、仮設畜用施設の必要性や手配等について一段とハードルが高くなった感がある。現在飼育している生物の命を守ることは必須であることから、工事実施中の飼育継続方法について十分に検討し、市に対して具体的な提案を行っていきたい。

現在別館ではアメリカビーバー、バイカルアザラシ、カナダカワウソ、ラッコを飼育展示しているが、高齢化や種の保存といった問題が顕著となっている。公的な野生動物保護意識の高まりとともに、生物の入手が法的にも金銭的にも年々困難になっていること、種の保存といった観点から他館との連携を図っていく必要があることから、今後も同種の飼育展示を継続していくのかについて、早急に方向性を決める必要があると考えている。

また、当初2期・3期で実施する予定だったエリアについては、基本計画自体がかなり漠然としていることから、より魅力ある・具体性に富んだ提案で肉付けをしていきたい。

検討できる時間は短く、検討が必要な内容は多岐に渡っているが、「水族館業務行う専門家集団」としての力量が試される時と自覚し、平成2年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、市に協力してリニューアルを成功させたい。多くの市民から喜んでもらえるリニューアルになるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。